

いつも一緒 富山のペットたち

これからの季節はスギ花粉の飛散量が増加し、花粉症の方にとって憂鬱な日々がやってきます。実はこのようなアレルギー反応は動物たちにもあります。中でも犬にアレルギー症状が多く見られるので、今回は犬のアレルギーについて説明したいと思います。

犬のアレルギーも人と同様に、体内にあるIgE（免疫グロブリンE）という物質が花粉やタンパク質などの成分を捕捉することで発症します。代表的な症状は強いかゆみと脱毛を特徴とすることで、一般的にはアトピー性皮膚炎と呼ばれています。発症年齢は1歳未満から7歳くらいと幅広く、かかった犬の約80%が春から秋に症状を示す例が多いとされています。



井上動物病院長
(高岡市野村)

井上 士也

犬のアレルギー

これらの犬は、症状の進行により年間を通じて発症することもあります。犬種による遺伝的な要因もあります。かゆみの起きやすい場所は目や口の周囲、耳四肢の屈曲部（脇、前肢や後肢の内側）、下腹部、手足の先、肛門周囲、背中です。ただしかゆみはノミ、ダニと

いった寄生虫やカビ類、細菌などの感染でも起きます。そこで、このような症状が認められたときは、動物病院で受診していただくことを勧めます。病院では寄生虫やカビ類、細菌感染の有無、発症部位、発症年齢、食事（おやつ類も含む）の種類、飼育環境、季節性の有無を調べ、採血を行います。

要なのは血液中のIgEの測定です。IgEが検出されれば、アレルギーになりやすい素質があると判断できます。さらに検査を進め、アレルギーの原因物質（アレルゲン）を特定し、①犬アトピー性皮膚炎②食物アレルギー③混合型（①と②を併せたタイプ）かを区分します。

かゆみの原因が花粉、ダニ、カビ胞子などの環境アレルゲンである場合（①のタイプ）は対応が困難ですが、花粉との接触を避けるため散歩を控えるとか、室内のハウスダストを低減するための工夫が必要となります。原因アレルゲンが回避できれば症状は緩和することができ

ます。牛肉、卵、小麦などの食物アレルゲンが原因である場合（②のタイプ）は、アレルゲンを含まない除去食療法を開始します。ただし除去食療法も難しい面があり、犬が勝手に盗み食いをしたり、原因食物を少しでも

強いかゆみ・脱毛 特徴



アトピー性皮膚炎になった犬、目元と口元が赤い



ワクチン接種後にアレルギーで顔面が腫れた犬

与えたりすると、すぐに発症してしまいます。

③のタイプは前述のそれぞれの対応を組み合わせていく必要があります。これらに併せ、適切なシャンプーや投薬を行って症状の改善を図り、快適に生活させてあげることが大切です。

次に、犬のワクチンアレルギーについて説明します。犬には、法律で接種を義務付けられた狂犬病予防ワクチンと、飼育者の方が任意で行う混合ワクチンがあります。いずれのワクチンも公衆衛生学上からも獣医学上からも病気の予防として重要

ですが、ごく一部の犬にワクチンアレルギー（ワクチン接種による副反応）が認められます。発生率はかなり低く1%以下です。

ワクチンアレルギーが発生するのは圧倒的に混合ワクチン接種を行った犬に多く、症状はさまざままで接種部位の局所反応やかゆい所をかく、じんましん、嘔吐、下痢、発熱、元気がなくなる、顔面の腫れ、さらに重篤な場合はアナフィラキシー反応でショック状態に至る場合もあります。

過去の注射でアレルギー反応が出たり体調を崩したりしたことがある場合も、午前中のワクチン接種をお勧めします。

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載します。